

エペソ人への手紙 5 章 25、28-29 節

5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

5:28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。

5:29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

ペテロの手紙第一 3 章 7 節

3:7 同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

皆さん、おはようございます。今朝も皆で集まることができませんので、ユーチューブで礼拝と説教を配信しています。長い間、私は自分の愛読書のひとつの主要ポイントを教会家族の皆さんにお話したいと思っていました。この本はクリスチャンの夫たちに向けて書かれており、聖書が教える夫像と夫としての責任について語ります。私は大学生時代そして卒業後、聖書に根差した素晴らしい教会に集っていましたが、エペソ 5 章やペテロ第一 3 章に記されたクリスチャンの結婚について何度も説教で聞いたことがありましたが、この本を 20 代半ばで読んで、大きく考えが変わりました。

その本は、ゲイリー・スモーリー著の「*If Only He Knew* (もしわかってくれたなら)」です。私の幸せな結婚生活があるのはこの本のおかげです。否、幸せな結婚生活は本のおかげだけであるはずがありません。もちろん、幸せな結婚生活を送るためには、夫婦ふたりともがキリストに自らをささげ切って、神のみことばに真剣に従う必要があります。それを前提に、この本は、結婚に対する私の向き合い方、そして私たち夫婦の固い絆に大きく役立っています。

私がこの本から学んだ一番大切な原則は、夫婦の和を保つ責任は 100% 夫にあるということです。私自身、これを最初に読んだときは驚きました。家庭の和を保つ責任はすべて夫にあるなんて、本当だろうか、まさかそんなはずはない、と思いました。妻にもそれなりの役割があるはずでしょう。男も女も罪や過ちを犯します。結婚生活を崩壊させる可能性はどちらにもあります。家庭の和を保つ責任はすべて男性の肩にかかっているなどということがあるのでしょうか。それは単純に、夫は家の頭としての務めを神からいただいているからです。この本を読んで気づいたのは、著者は各章の最初に、私が到底受け入れられないような主張を掲げます。けれども、各章を読み終えると、著者が述べたことに同意せざるを得なくなるのです。和を保つ責任はすべて夫にあるという教えも、そういう主張のひとつでした。私が実際に結婚したのは、この本を読んで 20 年も経った 48 歳のときです。けれども、結婚して数か月後のある日、ふたりで夕食を食べていると、俊江が静かに、「うちは平和ね」と言いました。ご両親が住む実家との違いにずいぶん感心したようでした。

私は大学入学とともに実家を離れ、そこで講解説教を重んじる素晴らしい福音派の教会を紹介されました。講解説教とは、聖書の書を一節一節教える説教です。そしてそこで、結婚について教える新約聖書の箇所、エペソ 5 : 22-33 を学びました。では、その箇所を読みましょう。その箇所を読むとき、妻について書かれた部分よりも夫について書かれた部分のほうがずいぶん長いことに注目してください。夫の責任のほうが重いのです。では、22 節から読みましょう。

エペソ 5 : 22-33

5:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

5:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

5:24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。

5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。

5:26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、

5:27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

5:28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。

5:29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

5:30 私たちはキリストのからだの部分だからです。

5:31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

5:33 それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

25 節には下線を引きました。

「5:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」自分の妻を愛しなさい。キリストが教会を愛されたように。キリストが教会のためにご自身をささげて死なれたように。妻を心から愛して大切にすることが幸せな結婚生活の土台だというのが、「*If Only He Knew* (もしわかってくれたなら)」という本の出発点です。

この個所について思いをめぐらしていると、夫は自己犠牲的に妻を愛するべきであることが心に留まりました。必要であれば、自分の願いや望みを捨てるのです。もちろん、多くの夫婦間では夫が一生懸命働いて経済的に家族を養うというかたちで、それが実践されています。しかし残念ながら、夫が自分勝手に稼ぎのほとんどをお酒やギャンブル、趣味につぎ込んでしまう家庭もあります。それはいけません。また多くの家庭では、妻が家族のために自分を犠牲にしています。しかし、聖書の教えによると、妻のために自らをささげるよう命じられているのは夫であることを忘れてはいけません。

先ほどの個所で、28-29 節にも下線を引きました。

「…夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。」男性の皆さん、自分自身を愛していますか。つまり、時間と労力をかけて自分の体をケアしますか。自分自身にするのと同じ配慮や思いやりをもって妻を愛さなければならないことを覚えておいてください。28 節の続きです。「…自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。」妻を思いやり、妻の面倒を見る人は、自分自身を愛していることとなります。

続いて 29 節です。ここは新共同訳で読んでみます。「わが身を憎んだ者は一人もおらず、かえって、キリストが教会になさったように、わが身を養い、いたわるものです。」自分を憎んでいる男性はそう多くはないでしょう。自分自身を養い、いたわります。自分自身の世話をすると同じくらい気を使って、妻を養い、いたわる必要があります。ここで、キリストが私たちの模範です。主は人々に配慮し、教えられました。また、人のために死なれました。それは、

人が贖いを得るためです。キリストは私たちのために死んでくださったのです。私たち夫はせめて、妻のために自らをささげ、妻の必要を満たしましょう。

「夫」という単語の背景について考えたことはありますか。何年も前ですが、私は欽定訳聖書（文語の英語訳）で不思議な個所にこの単語が登場しているのに気づきました。それは、ヨハネ 15 章の冒頭です。「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。」という個所ですが、この「農夫」という部分です。父なる神はぶどう畑を手入れするお方です。土地を耕し、植え、木の世話をし、ぶどうを収穫します。欽定訳ではこれを「夫」と訳しています。

ヤコブ 5:7 の「こういうわけですから、兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。」という個所でも欽定訳では「夫」という単語が使われています。農夫は地を耕し、作物を育てます。その生長を気長に待ち、収穫を得ます。

畜産という分野がありますが、英語ではこの中に「夫」を意味する **husband** という単語が含まれています。辞書によると畜産とは、「家畜動物の繁殖および飼育に関する科学」とされています。

つまり、「夫」という単語のもとの背景にあるのは農業の単語です。作物を養い育てる人、動物を繁殖して育てる農夫や畜産に関わる人、養うことに関わりがあるのです。

私はここから結婚に関する教訓を得ています。男性の皆さん、私たちは妻を養わなくてはなりません。皆さんは、人としてクリスチャンとしての妻の成長を手助けしていますか。妻が成長できる環境を家庭内で提供していますか。妻は育てる側の人間だと思われがちですし、子どもや夫の世話という意味でその役割も果たすでしょう。しかし、「夫」という単語は元々養う人を指します。エペソ 5:29 は、男性が自分を養いいたわるだけでなく、妻をも養いいたわるべきだと教えます。男性の皆さん、そうしていますか。

私がまだ若くて理想を追い求めていたころ、エペソ 5 章のこの部分を読んで、その冒頭の「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」という部分に目が行きました。これは理解できました。というのも、自分の家でもよその家庭でも、父親が家長であり、主人だったからです。

また、創世記 2 章の女が造られた個所でも、アダムの助け手として造られたとあります。創世記 2:18 には、「神である【主】は仰せられた。『人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。』」とあります。女はアダムの助け手として彼のあばら骨から造られました。これが、女性の立場、女性の存在意義だと思われてきました。そして、エペソ 5:22 を読むと「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。」とあります。さらに、23 節は「…夫は妻のかしらであるからです。」と語ります。女は男の助手として造られたという印象を受けてしまいやすい内容です。

私は、1970 年代に大人になりました。当時は、フェミニスト運動が盛んで、うちのように保守的な家庭はこれに抵抗していました。創世記 2 章やエペソ 5 章は、女は夫を助け、夫に従うように教えている、とうちではストレートに受け取っていました。やがて私は、妻は夫に従うべきだという教えに一部のクリスチャン女性が難色を示しているのに気づきました。それを見て、そのような女性たちは聖書に反抗しているのだろうか、と思いました。そして、ある若い説教者がこう言うのを聞きました。彼は、「妻たちよ。…夫に従いなさい。」という命令に不平を言う女性たちは不従順なのだと思いつけていたそうです。けれども、その女性たちがこの教えに抵抗を感じる本当の理由に気づいたそうです。それは、男性が自分たちの都合の良いように

この命令を利用することです。妻の思いより自分の願いを押し通すためにエペソ 5 : 22 を使うわけです。妻を自分勝手に支配する人もいます。この個所は、妻は助け手だからいつでもどこでもすぐに自分の思い通りに動いてくれるという教えだ、と思う世間知らずの理想主義な若い男性もいます。私もそのひとりでした。けれども、私も 20 代半ばになってこの若き説教者と同じことに気づきました。この個所について不平を言う女性たちは聖書にケチをつけているのではなく、この個所を夫たちが誤用していることが不満だったのです。

ご紹介した本の著者ゲイリー・スモーリーの実体験についてここでお話ししましょう。彼もまた、かつては若い理想主義のクリスチャン男性でした。そして、エペソ 5 : 22 の教えから、妻は何でも自分の言うことを聞いてくれるはずだと思っていました。彼の体験は次のように本の中で紹介されています。

バレンタインデーの午後 4 時。私はバスケットボールの試合があったのを思い出した。その夜、私は試合に出ることになっていた。私は電話に手を伸ばし、まだ結婚して半年も経たない新妻ノーマに電話した。

「今晚、バスケの試合だったって言うのを忘れてたよ。7 時ごろに集まるんだ。だから 6 時半ごろに迎えに行くよ。」

重い沈黙の後、妻は答えた。「でも今日はバレンタインデーよ。」

「わかっているけど、チームのみんなに約束したから行かなきゃ。がっかりさせるわけにはいかないよ。」

「でも、ごちそうも作ったし、キャンドルも…」

「それは明日でもいい？」返事はなかった。私は続けた。「妻が夫に従うのが大切だってわかっているよね。今晚の試合は行かなきゃならないんだ。結婚生活を最初からうまくやっていくためには、今からちゃんとしないとね。僕がこの家の家長なんだから、どうするか決めるのは僕だよ。」

迎えに行くと、妻は氷のような冷たい態度だった。妻の気分を害してしまったのは明らかだったが、いずれ夫に従うことを学ばなければならないのだから、早いうちに学ぶのがいいだろうと思った。

妻に服従を強要するのは夫として最低の行為だとは、当時の私はまったく知らなかった。

この話を初めて読んだとき、妻が従わなかったことが問題ではなく、愛する妻が手間暇かけてバレンタインデーの夕食を準備してくれたことをなんとも思わなかった夫に問題があるとすぐにわかりました。私は結婚前にこの話やこれに似た話を読んでいて感謝しています。妻が夫に従うというのは、夫のすべての願いを聞き入れるということではありません。男性も配慮を示すべきです。

ですから、夫の皆さんにお伝えしたいことがあります。

他の人宛ての手紙を読んではいけません。エペソ 5 : 22-24 を読んで、その通りを自分の妻に期待できると思ってはいけません。ましてや、この個所を引用して、これに従うよう強要してはいけません。使徒パウロはこの個所で妻たちに語っているのです。夫たちに向けられた言葉ではありません。ですから、夫の皆さん、この個所にこだわらないでください。他の人宛ての手紙を読んではいけません。

そうではなく、自分宛ての手紙を読みましょう。皆さんは、エペソ 5 : 25-33 に従っていますか。

25 節：あなたは、妻を愛し、自分の命を妻のためにささげていますか。

26-27 節：しみのないきよい器、誠実なクリスチャンと妻がなれるようにできる限りの手助けをしていますか。

28 節：自分を愛するように妻を愛していますか。

29 節：妻を養いいたわっていますか。

31 節：本当に両親を離れて、妻との関係を地上の人間関係で最優先させていますか。

33 節は、この部分のまとめとして夫と妻の両者に勧めています。第一に夫がしなくてはならないことは妻を自分と同様に愛することです。そして妻は、ここでは「従いなさい」とは書いていません。最後の締めくくりでは、妻は夫を敬いなさいと教えています。尊敬は非常に大切です。ところで、妻が夫を尊敬できれば、その夫についていくのは簡単だと私の妻は言います。そして、女性には尊敬できる人物が必要だと俊江は言います。ですから男性の皆さん、そのような人になるよう努めましょう。女性が尊敬できる人になりましょう。

では、創世記 2 章に戻りましょう。女が「助け手」として造られた個所です。新改訳と口語訳では「彼にふさわしい助け手」、新共同訳では「彼に合う助ける者」と訳されています。では、一体どういう意味でしょう。

ヘブル語では、エーゼル・ケ・ネグド・オー(עֶזְרָא קֵנְגֻדֹא)です。注解者アダム・クラークによると、その意味は、男にとって女は「助け、自分自身の片割れ、自分から造られた、完全なる生き写しである。これは、女が男の完全な生き写しであるのが本来の姿だと示唆する。そこに優劣はなく、すべてにおいて男自身と同じで同等である。」女は男の片割れで生き写しであり、そこに優劣はなく、すべてにおいて同じで同等なのです。女は二流市民でも男のしもべでもありません。女は男の完全な生き写し、完璧な相棒なのです。

さらに、この「エーゼル」というヘブル語の単語は、私たちにとっての神を表現するのに使われることがあります。例えば、詩篇 40 : 17 の後半で、ダビデは神についてこう言います。

「…あなたは私の助け（エーゼル）、私を助け出す方。わが神よ。遅れないでください。」詩篇 33 : 20 にはこうあります。「33:20 私たちのたましいは【主】を待ち望む。主は、われらの助け（エーゼル）、われらの盾。」（詩篇 115 : 9-11 も参照。）出エジプト記 18 : 3-4 で、モーセは二人の息子に名を付けます。ひとりはゲルショム、そして、4 節はこう言います。「もうひとりの名はエリエゼル。それは『私の父の神は私の助けであり、パロの剣から私を救われた』という意味である。」エリエゼルというのは、「神、私の助け」という意味です。

「助け手」とは、助けが必要な人に対して何かを提供できる存在です。神は私たちの助けですから、助け手が目下ではないことがわかります。アダムのある骨から造られた女も同じです。女はアダムの目下ではありません。アダムには助けが必要で、女は手を貸せる人なのです。ふたりはパートナーです。

創世記 1-2 章をもっと読みたいところですが、時間の関係ですべては読めません。スクリーンでご覧ください。

創世記 1 : 26-28

1:26 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」

1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

創世記 1 : 26-28 は、人類（男女両方）が神のかたちに造られたと語ります。そしてともに動物を支配するのです。また、ともに生み増やして、地を満たし、地を従えるのです。神は男女両方にこの地を支配する責任を与えられました。

創世記 2 章は、さらに詳しい記載です。神は男をまず造られました。

創世記 2:7-8

2:7 神である【主】は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。

2:8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

創世記 2 : 7-8 は、神が地のちりからアダムを造ったと語ります。そして、神は東にエデンの園を設け、人をそこに置いてその世話をさせました。これがアダムのひとつめの役割です。

創世記 2:19-20

2:19 神である【主】は土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物につける名はみな、それがその名となった。

2:20 人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。

アダムには他の役割がありました。それは、動物に名前を付けることです。動物にもオスとメスがいたと推測できます。そして 20 節には、「しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。」とあります。それぞれの動物には相棒がいたのに、アダムにはいませんでした。それで、21-22 節で神はアダムを眠らせ、そのあばら骨から女を造られました。

この創造について、心温まる詩があります。有名な注解者マシュー・ヘンリーの詩です。

女はアダムの脇腹のあばら骨から造られた
頭ではなかったのは、男を支配するためではないため
足ではなかったのは、男に踏みつけられないため
脇だったのは男と同等となるため
男の腕で守られるため
心の近くに置いて愛されるため

改めて、神が 1 章 28 節で語られた内容を見ましょう。

創世記 1:28

1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

神は、男と女に共通の命令を与えられました。それは、生み増やして、地を満たし、地を従えて、支配することです。つまり、神の被造物の管理です。そして、それをふたりで一緒にするのです。

ここで新約聖書に戻って、使徒ペテロから夫たちに送られた助言を読みましょう。ペテロ第一 3 : 7 です。「3:7 同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」口語訳には、「…認めて、知識に従って妻と共に住み、…尊びなさい。」とあります。

最初に、妻のことを「わきまえて」「認めて、知識に従って」妻を尊敬しなさい。

次に、（これは興味深い内容ですが）、ふたりは「いのちの恵みをもとに受け継ぐ者」です。人生を分かち合い、地をもとに支配するのです。ふたりは、「ともに受け継ぐ者」です。ですから女性を見下してはいけません。妻はあなたの人生のパートナーなのです。

先ほど、ゲイリー・スモーリーが新婚だったころバレンタインデーに犯してしまった間違いについてお話をしました。彼は、他にも自らの結婚生活の過ちについて語っています。その中のひとつを説明した後で、彼は妻から学んだことについて記しています。

ペテロ第一3：7にある聖書の教えに私が背いていることを妻はわからせてくれた。それ以来、尊敬こそすべての人間関係の礎だということに気づいた。

尊敬とは、人や物を価値がある、大切だとみなすことだ。私にとってはノーマより仕事や趣味のほうが大切なのだと彼女に思わせてしまった。人生で一番大切な人のはずなのに、知らず知らずのうちに、尊敬することを忘れていたのだ。

これは、私がこの本から学んだ非常に重要な教訓です。尊敬こそすべての人間関係の礎です。

私のスタディバイブルには、7節について次のように注釈があります。「『…わきまえて…生活し、…』は、おそらく神のみこころにそった生き方に焦点を合わせる。これには、妻の必要を理解することも含む。『弱い器』については、与えられた権限、感情、または身体的な強さについてという点で解釈の相違はある。ペテロはおそらく、一般的に男が女より身体的に強く、暴力や暴言によって妻を脅す誘惑にかられることをふまえているのであろう。男と女とは『いのちの恵みをもとに受け継ぐ者』という共通の宿命がある。それは、両者が同等に神のかたちに造られているからである。（ガラテヤ3：28参照）夫が敬虔さをもって妻を扱わないならば彼らの祈りには耳を傾けられない。」（Crossway. “ESV® Study Bible より抜粋）

使徒ペテロは、これらのことをするようにと夫に勧めた後、「…それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。」と語ります。もし、妻に対して敬意を欠いた思いやりのないふるまいをするなら、神はそういう夫たちの祈りに答えるのを控えられるかもしれません。

メッセージを締めくくる前に、「*If Only He Knew*（もしわかってくれたなら）」という本からあとひとつだけ教訓を分かち合いたいと思います。

先週、今日のメッセージを準備するためにこの本を改めて読んでみました。ゲイリー・スモーリーによると、彼のもとにカウンセリングを受けに来た男性の多くは、破綻寸前の夫婦関係を修復するためのアドバイスをなかなか素直に聞き入れないということです。態度やふるまいを変える必要があると伝えても、彼らはそんなことはできないと思うのです。その一例が、ジョージという名の男性でした。彼は妻から離婚を突き付けられていました。面談の初期段階で、スモーリー氏は簡単な質問をしました。次のようなやり取りです。

私は彼に尋ねた。「奥さんとやり直したいのですか。」

「はい、そのためならどんなことでもします。」

「よろしい。自分のこれまでの生き方を変えるつもりのある人なら、私はいつでもお手伝いします。」彼は、変わるつもりだときっぱり言った。けれども、その決意は次の私の発言で崩れ去った。「あなたは相手を支配したり束縛したりする傾向があるので、その部分を変えていく必要があります。そのような態度は、奥さんのことを心から愛していない表れです。」

彼はカンカンに怒って、自分は悪くないという持論を延々と述べ、私の助言に抵抗した。この人は本当に変わるつもりがあるのだろうか、と疑問に思った。

ジョージの妻はすでに離婚の準備を進めていたので、ジョージは離婚裁判のために裁判所に行かなければなりませんでした。スモーリー氏は話の続きを次のように語ります。

私は尋問が終わるまで、彼の友人ふたりと一緒に裁判所でジョージを待った。ジョージは法廷から飛び出してくるなり、叫んだ。「アイツ、俺の退職金の2割をくれだつて。2割だぞ！誰がやるもんか！」

私は改めて尋ねた。「奥さんとやり直したいですか。」彼は、うなずいた。「それなら2割と言わず、25%渡しなさい。」私はそう言って、今こそ奥さんに敬意を示し、思いやりをもって接するべきだ、と念を押した。その後、彼はバツイチになったが、それは長くは続かなかった。

数か月後、私はスーパーでジョージとばったり会った。彼は「妻と再婚しましたよ」と得意げに言った。「妻のためにすべきことをあなたからアドバイスされたときは、あり得ないと思いました。そんなことできるはずがないと。最初はとにかくやる気だけで頑張りました。神を求めて神に従う人には神が報いてくださるとあなたが言ったから、とにかくやったんです。でも、すごいですね。3か月も続けると、そうするのが楽しくなってきましたよ。」

ジョージはやっと、自分の妻が特別な存在で、「重要：取扱注意」という印が妻についてあるかのように、優しく接しなければならなかったことがわかったのだ。彼は、こじれた人間関係を修復する秘訣が尊敬であることを知ったのだ。

こじれた人間関係を修復する秘訣は尊敬です。「尊敬」という単語は、この本で繰り返し登場します。妻を尊ぶことの大切さ。あなたが妻を大切に思っていることを妻に知らせなくてはなりません。人間関係の中で最優先であることを妻に知ってもらう必要があります。妻がそう感じられないと、夫婦関係は乗り越えられないほど緊張するかもしれません。一方、あなたが妻を愛し、大切に思い、尊んでいることを妻が知っていれば、妻の心はあなたのものです。その愛や尊敬が、あなたの行動に示されていなくてはなりません。

この話の中でもうひとつ興味深いと思ったのは、スモーリー氏のアドバイスはあり得ないとジョージが言ったことです。ジョージは言いました。

「妻のためにすべきことをあなたからアドバイスされたときは、あり得ないと思いました。そんなことできるはずがないと。…でも、すごいですね。3か月も続けると、そうするのが楽しくなってきましたよ。」

この本の中には、同じような反応が他にも載っています。言われたとおりにするのは最初はたいへんだったが、しばらく経つと、そうするのが楽しくなってきたという報告です。本の後半で、スモーリー氏は自身の結婚生活でも同じ発見をしたと言います。

妻を愛しましょう。妻を尊び、大切にしましょう。優しく思いやりをもって接しましょう。妻にそれが伝わるように、実生活の中でそれを示しましょう。心を込めてするならば、きっとあなたも、そうするのが楽しいと思えるようになるでしょう。ジョージはそうになりました。ゲイリー・スモーリーもそうでした。私もそうです。

これで今日のメッセージは終わりです。

ゲイリー・スモーリー博士著「*If Only He Knew* (もしわかってくれたなら)」の英語原書は、[Amazon.co.jp](https://www.amazon.co.jp) および [Amazon.com](https://www.amazon.com) にて、ペーパーバック版、Kindle版を購入できます。クリスチャン男性に強くお勧めします。邦訳はありません。